京都大学学生有志主催

「国際高等教育院(仮称)構想について考える」議事録

日時：2012 年 12 月 14 日（金）18:30-22:15
場所：京都大学人間・環境学研究科地下大会議室
参加人数：70-80 名

プログラム　（司会進行：棚田）

1. 本部部局長会議の近況報告　（杉万教授）
2. 国際高等教育院（仮称）構想をめぐる経緯　（大久保）
3. 人・環教員有志の活動報告　（阪上教授）
4. 京都大学学生有志の活動報告　（寺山）
5. 質疑応答、自由討論
   1) 総人・人環を統合する組織立ち上げの提起　（瑞慶覧）
   2) 一般教養教育をどう見るか　（村上）

（　3) 「国際高等教育院」に関する意見交換会における自由討論のために　（中川）　）

※プログラムについて当初は 2→4→3→1→5 の順であったが、先生方の時間の都合上、上のようになった。
※自由討論の議題について、時間の都合上 3)は扱わずに終わった。

1. 本部部局長会議の近況報告

〇経緯について
・学生有志作成の資料 A にのっとって説明してくださった。

〇12/4 に行われた部局長会議について
・4 日当日になる前に、メールで資料が送られてきた
・当日はおよそ 2 時間半がこの件についての議論に費やされた。
・人環と理が強硬に反対しているために、継続して考えるとして、12/18 の臨時部局長会議へと継続されることになった。
　　→総長に修正案を求められる。
・理学部案。人環も理学部案に沿った姿勢をとる。他に文学研究科と教育学研究科が近い立場を取っている

〇理学部が提起している案について

・教育院には教授会を置くもの。ただし長は総長指名。

・授業を行う人はそのままの部局に所属し、企画をする人が教育院にいればいい、とするもの。

〇質疑応答

Q: なぜ他部局は反対しないのか？

A: 二点理由が考えられる。

一点目は松本総長の恐怖政治になっているため。

二点目は教員の全員が教養教育に関心があるわけではなく、教養教育を他の教員が担ってくれるのならば、自分たちは自分の研究ができると考えられるため。

2. 国際高等教育院（仮称）構想をめぐる経緯　（資料 A）

〇そもそも国際高等教育院とは

・全学共通教育はもともと、高等教育研究開発推進機構が企画を、主に人環の教員が実施を担ってきた。

・文科省などの流れによって、この企画と実施を一元化するという流れによってできたのが、この国際高等教育院構想。

・なぜ、人環総人の教員がその実施の責任を担っているのかというと、この学部研究科は教養部を母体としたものだから。

・思修館などとは別物。

〇教員からの補足

・高等教育研究開発推進センター：教養教育の企画

・高等教育研究開発推進機構：「お伺いを立てるところ」

・教養教育における３パターン

①縦割り（各学部が当該学部に必要だと思われる教養教育を担う）

②教養部型（総人・人環が担う）

③①と②の中間に機構がいる。その機構は「お伺いを立てるところ」であるので、「機構は機能していない」ととらえられた。

3. 人・環教員有志の活動報告

〇活動報告

・11/12 から演説などを開始し、署名活動も行ってきた。

・11/30 に総長へむけ署名を提出。

・12/03 江島監事に監査請求を行う

〇監査請求について

・人環教員有志 21 人から監査請求を行った。

・いつまでに監査を終わらせるというものではないため、次の部局長会議のある 18 日までになにかしらの結果が出るのかはわからない。

4. 京都大学学生有志の活動報告　（資料 B）

〇今日開いた会について

・先生方のお話を聞くために開いたものではない。

〇活動報告

・11/15 の職員組合による集会後に集まった学生で活動を始める。

・署名活動やビラまきなど。

・署名は 11/30 に総長にむけ提出。

・抗議書、要求書、請願書を提出。

・全学の先生方に向け、これまで行ってきた学生有志の活動を報告する手紙を送る。

～15 分休憩～

5. 質疑応答、自由討論

■質疑応答■

Q: 教養教育についてどのように考えるか？

A(教員): ネイティブを雇ったところで英語が話せるようになるとは思えない。
教育院構想は、専門家の知見を無視して素人の考えを押し付けているようなもの。

A(学生): 教養とは登山のようなもの。どんな道があって、どの道が正しいとかはない。ましてや京大生なのだから、荒れた道を進んでいく人もいるだろう。その進める道の多様性を失わせないでほしい。

A(学生): たしかに今の科目やその提供のされ方にも問題があるといえる。

A(学生): 教養とは、自分の頭で考えられるようになることなのではないか。学生にとってはアクチュアルなものとしては感じることができず、大半の授業はそこに座っているだけ。その中でも光るものがあると感じたから、自分は今修士課程にいる。

Q: 教員の想いが学生に伝わっていないのでは？教育院に反対するくらい自分たちのやっている教養教育に自信があるのか、教員はそんなに教育について考えているのか？研究が大事なのでは？

A(教員): 教員にとって、研究は大事。でも教養教育の重要性をわかっている人もわずかながらいる。
もし教育院が本当にできてしまったら、今よりも悪くなる。

Q: 教育院ができたら、研究ができなくなると言っていたが、なぜそういえるのか？

A(教員): 「教育に沿った形で研究してもらっても構わない」、教育院では「教育が責務」とされる。研究 OK と言われても、事実上無理。そもそも大学にいる人は「研究がしたいから残っている」という人が多数という構造的な問題もある。

■自由討論■

1) 総人・人環を統合する組織立ち上げの提起　（資料 C）

[提起者]

・全共闘時代はある活動するための拠点として自治会という組織を作った。本来ならば逆であるはず。もともと「自治会」というものがあり、それに付随する形で、ない方がいいがある種の活動が起こるものである。

・総長は、教養教育は専門教育につながる教育であるべきで、それを受けることによって、学生はエリートになるらしい。

・人環の教員は、無駄を生むものであり、その無駄がその人のためになる、と主張する。
　→そもそも学生が自分たちがどういう教育がいいのかを考える場がない。

・大学という場について。遊びの合間に単位を取って、コミュ力を高めて、エンジョイして、就職して、たくさんお金稼いで。そういう場であるならば、大学とはなんなのだろうか。

・教員は、学生同士の対話が少ないというが、夜になると鍵は閉まるし、そもそもそのような場所がないのではないか。

・〈資料 C〉にある「機能」について。
　・この機能は自治会ができた時点でできるものではなく、そういう機能を持つことができるように努力をしていくようなもの。
　・この機能担うために、日々の継続した活動が必要であり、この継続した活動によって、信頼が生まれ、その結果として自分たちの意見が届きやすくなる、といいなぁ。

[質疑応答、意見など]

O(教員): 自治会を作るということには賛成。むしろ今までなぜなかったのか。
できた際には人環フォーラムなどにも人を派遣していただけたら。

Q(学生): 自治会を作るのには賛成だが、今回の問題をどうしたらいいのか。他学部の人も協力している現状を、投げ捨てることになるのでは。

A(提起者): 総人の自治会を作ることで、自分の学部としての主張のスタンスが明確になるのではと思う。有志自体の活動をこちらに吸収させる、というつもりはない。

O(学生): 個人ではなく、自治会を通して伝えることで通る意見もあるかもしれない。学生の関心のある分野を教えてくれる先生がいないという場合に、その先生をとってくれたりしないだろうか。

O(学生): 昔も自治会作ろうという動きがあって、懐かしく聞いていた。
A(提起者): 懐古におちいらないでください。

Q: 自治が脅かされている危機感から生まれたのは素晴らしい。どういう経緯で自治会を立ち上げる発想が生まれたのか？
A(提起者): 端的にはルサンチマンから。もともと総人に入ってから自治などというのは感じたことがなかった。総人という学部が掲げている理念にあこがれて入ってきたが、その理念そのものがルサンチマンの表れだということがわかった。学部のほかの人と仲良くなるために作りたいというわけではない。もちろん仲良くなることも必要だと思うが。

Q(学生): この問題についてこれからどうしていくつもりか？また、農学部の自治会がどの程度活動しているのか知らないし、実体がないのではないかとすら思う。総人の自治会は他学部の自治会とどう連携していくのか？
A(学生): 他学部自治会と連名/連携することは可能。この問題について関わりたいという人は、自治会を通してだけではなく、有志の別の形で関わり続けることもできるのではないか。
A(提起者): 学生有志の活動をそのまま引き継ぐわけではない。学生有志の活動でうまくいかない点があったからこのような提起をしただけ。
A(学生): 教育院/教養教育について、考える場はそれで続けていくべきで、その一方として総人としてなんとかしていかなければならないと思う。この両者はある程度の期間は並存していてよいと思う。

O(学生?): 総長は京大よりも上位の大学である東大の駒場から、この教育院の案をとってきた。駒場は進振りという制度があるために、興味のない授業も効率よくいい成績をとらなければならないという実情があり、学級崩壊しているようなクラスもある。教養教育をどうするのか、ということは 100 年単位で考えなければならない問題であるが、今回の件に関する事態は切迫しているといえる。

2) 一般教養教育をどう見るか　（資料 D）

[提起者]
・総合人間学部に属していないと、この件を問題に感じないのだなぁという実感。
・教養教育について、批判に耐えうる意見を掲げるべきなのでは。

・京大当局が発表している資料の内容について
  ・京大生の現状把握（自学自習ができない、楽勝科目に流れる、等）を見ると、馬鹿にされているとしか見えない。
  ・これが京大生の現状なのであるならば、京大になんて来るのではなかったとすら思う。
  ・教育院構想やカリキュラム改編は、京大生の知性を信頼されないままに作られている。

・この現状が当たっていないという前提で今回の提起を行うし、この現状が当たっていないのならば、なんらかの手段で抵抗すべきではないか。

・大学と社会の関係は交流を図れていないと感じる。

・学問の場においても、領域ごとに交流を図れていないのではないか。
・交流を図れていないがゆえに、互いの学問の理解ができておらず、自分の学問領域を守るために自己防衛をするしかない。こういう方向は多様性という観点からみるとよくないのではないか。

・京大全体が世間の流れという「外圧」に一致した対応をすべきなのではないのか。

・学士号の評価を実質化するという動きは、高校の延長上に大学があるという見方なのではないか。この流れの中で、大学をどのようにとらえるべきなのか。

・一般教養教育について、研究者が他分野の人に、自分の研究やその研究領域をわかりやすく語る意義というのはあるはず。それができないのならば、総長の改革もやむなし、と言わざるを得ない。

[質疑応答、意見など]

O(教員): 総長の構想が進むと、自主性、主体性が奪われてしまうのではないかという危惧。
教養とは、なぜ教養を学ばなければならないのか、なぜ教養を教えなければならないのか、そのことを知っているというまさにそのことを教養と呼ぶのではないだろうか。
他大学では自主性、主体性を持った学生は一割程度だったが、京大には三割いると感じる。七割の人間を目覚めさせるより、この三割を精鋭化させたいと考える。

O(学生): 北部キャンパスの方が、大学の自治が残っているように感じるが、今回の件に関して、時計台よりも北にこの現状/情報が行き届いていないのではないか。
研究と教育（教養？）のはざまにある修士の人たちこそ、この問題について考えるべきなのではないだろうか。

Q(学生): 「外圧」に耐えるというのは、それこそ総長の独裁が完成したときなのではないか？
自分で考えるからこそ不一致が起きるのではないだろうか。不一致する中で、一致をとることには時間がかかる。そのことをもっと主張してもいいのではないか。
A(提起者): もちろん自分で考えているからこそ、そう考えている人が多いからこそ不一致がおき、それを許容する学風として打ち出していくべきであると考える。

時間になったために打ち切り。
話したい人は違う場所でさらなる議論を行った模様。